

東京福祉大学大学院(通信過程)における田嶋教授の授業内容について

私は、2009年4月より2012年3月まで大学院修士課程に在籍していました。一年次は、臨床心理学の必須科目の中で、また二年次、三年次は、二年生・三年生が合同で行うケースカンファレンスの一部を田嶋教授から指導を受けました。私は、三年間を通じて出席率は高く、略、田嶋教授の授業は全て出席しているものと考えます。

田嶋教授の授業の特徴は、田嶋教授がファシリテータ役となり、大学院生十数名が一同に向かい合って、それぞれが今・ここで感じている事を安全に守られた擬似的環境としてのこの場において発言できるように訓練することと考えます。職場や実社会の中で、自分の考えや感じを余りに端的、直接的に発言し過ぎると対人トラブルや仕事上での問題を起こすこととなります。また、それらを恐れて、常に自分の心の中に留めてしまうことは心の健康上良くない。またそれがその人の習慣として人格に形付けられると思われれます。

したがって、大学院という学びの場で、自分の気持ちを素直に相手に伝えたり、相手の発言を構えを持たないで聴けるように訓練することや、更に今迄で自分が習慣として形作ってきた性格や思考の偏りに気づき、それを適正に修正することは、カウンセラーを目指す学生にとって特に重要な課題であると思います。ゆえに田嶋教授の授業は、この形式に重点を置いたものと考えます。普段、この様な場に慣れていない学生の発言を促し、気づきを高めるには、ファシリテータ役は、学生の心を少しだけ揺さぶったり、刺激を与えるなど様々な方法が必要となります。

一年生当時、初めてこの形式の授業に出席した学生は、ファシリテータ役の心の揺さぶりや刺激的指摘によって、様々な戸惑いや場合によっては心的な辛さを感じたり、学生間の発言のやり取りが少し過熱して関係が少し険悪になったこともあったと記憶します。

また学生も一応入試の中で適性は審査されているとは思いますが様々な人がいて、中には私が見ても明らかに適性に欠けると思える学生も存在し、田嶋教授の指摘の意図を理解できず、被害的に捉える学生もあった様に思います。しかし、概ね二年・三年のケースカンファレンスの授業を通じて、私も含めて多くの学生は、田嶋教授の授業の意図を正しく理解して、大学院の授業を通して、それぞれが切磋琢磨することで臨床家としての基礎的な資質を向上させた人が多いと確信しています。

私は、心理臨床家になるためには、勿論、様々な理論や技術、方法などを経験と併せて習得することも必要ですが、クライアントに対しカウンセラーは鏡となるのが大切だと考えます。その鏡を磨くこと、すなわちカウンセラーとしての人格や人柄といったものを常に磨いていくことや、カウンセラーも同じ人間として欲望や怒りなど様々な感情にさらされていることに気づき、それらの感情を適正に保ち調整できるような純粋性の大切さを田嶋教授の授業から学び取りました。これからも研鑽を通じてあるべき目標に向けて努力して行きたいと考えています。

平成 24 年 6 月 19 日

田嶋先生の授業について

東京福祉大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻の田嶋先生の授業は、これから臨床心理士を目指す私たちにとっては、授業を受けているその時も、現在考えても欠かせないものでした。私は、先生の授業はとても役に立つと思ったので、ゼミの方も積極的に参加させて頂きました。

田嶋先生の授業は、グループでのいわゆる「教育分析」と捉えることができます。精神分析療法においては、臨床心理士が精神分析を受けることを体験することはとても重視されています。

臨床心理士には「自己分析」が必要ですが、東京福祉大学大学院の心理学研究科の先生方が勧めている『臨床心理士試験徹底対策テキスト&予想問題集 2011』にも、「自己分析とは、自らの生まれや育ち、親をはじめとする家族との関係、所属してきた組織やそこにおける人間関係などを振り返り、それが自分自身にどう影響を与え、その結果、自分自身はどういった対人関係のパターンや考え方、価値基準をもっているのか、ということを理解する過程です。自己分析が必要な理由は、臨床心理士自らの性格や価値観によって、クライアントに対する理解が妨げられ、クライアントの問題解決が阻害されることを避けるためである、ということができます。そのために、臨床心理士は、常に自らの転移-逆転移関係を見つめることにより、同じ過ちを繰り返さないようにすることが大切です。」と書かれていますが、その自己分析をする場が教育分析であり、田嶋先生の授業はグループで教育分析をするという場面でした。

もちろん自己を分析するということは、大変難しいことですので、学生同士では下手をすると「ただの言い合い」みたいになることもありましたが、田嶋先生はスーパーバイザーとして、きちんと軌道修正してくれるので、議論がずれることはあまりありませんでしたし、何より安心感がありました。田嶋先生は、自己分析ですから、学生にきついことを言う時もありましたが、それはその学生に気付いて欲しいからであり、きついことを言わなければならないことは決してなく、必ずその後フォローもあり、先生と学生との信頼関係の中で行われていたので、先生に何か言われたことで、傷つくようなことはありませんでした。むしろ目が覚める、というか、自分はそういう面を持っていたんだ、と気付くことばかりでした。もし、田嶋先生に何か言われたことで、先生に対して不信感を持つような学生がいるとしたら、その学生は、本当の自分を受け入れられない人だと思います。そのような人が臨床心理士になったとしても、心理面接を行うことは難しいと考えられます。

現在私は、地域での心理の仕事をしており、不登校・発達の問題・虐待・育児不安など様々な母親や子供たちの心理面接をしています。あの時の田嶋先生の授業があったからこそ、今私はカウンセラーとして、クライアントに同情したり、転移-逆転移に巻き込まれたりすることなく、自分に湧き上がる気持ちも捉えながら客観的に面接をすることができるようになりました。先生は、日本の臨床心理学会には欠かせない人だと思っています。本当に先生には感謝の気持ちでいっぱいです。これからも先生のゼミや講義に参加して勉強していきたいと思っています。

平成24年 5月30日

住所

氏名

田嶋 清一先生

こんにちは。先生の講義に関する私の率直な感想を述べた文書をお送りします。少しでもお役に立つことをお祈りにしております。

世の中には変な奴も多いいものであね。一日も早く公正な判断がなされることを願っています。



甲第 35 号証の4の2

田嶋 清一教授の講義について

わたくしは、平成23年度に東京福祉大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻博士課程前期を卒業いたしました[REDACTED]と申します。現在、臨床心理士として[REDACTED]

[REDACTED]として嘱託勤務いたしております。

田嶋清一教授の講義は、わたくしの現在の臨床活動において心理援助職としての基本的姿勢を形成するうえでもっとも役に立つものでした。エンカウンター形式で進められた講義は、参加者ベースで展開されるものでした。ライブの性質上、何が浮上するのか分からない緊迫感と期待感にわたし自身は大いに刺激を受けて毎回楽しみにしておりました。場が停滞したとき、あるいは参加者が表面的にすすめようとしていたときは、田嶋先生のすどい指摘があり、全参加者自身の気づきを深めるような関わりが随所にありました。それに対する参加者の反応はまちまちであり、あくまでも知的に反論して自分自身の傾向を認めようとしないう人、無反応にかかわす人、感情的に反応する人がいました。わたしは、それ自体が非常にその人のあり様が現れており、自分自身の反応も含め、人間理解、自己理解に大いに役に立ったと思っています。

おそらく、そういう場面で居心地が悪く感じる参加者もいたと予想されます。けれども、それを不快な体験ととらえるのか、あるいは自分自身への気づきあるいは他者理解を深めるととらえるのかで、その後の臨床の場において違いが出てくると感じています。現在現場にでてみて対人援助職、とりわけ人の心の領域に踏み入る専門職は上記のような研修をへてはじめて体得できる感覚があると思います。語弊を恐れずに言わせていただければ、それができない方は、臨床心理士になってはいけないとさえ思います。以上の理由から、わたくしは田嶋教授の授業を何ら不当なものとは感じていないことをここに明確に記したいと思います。

平成24年5月30日

[REDACTED]



田嶋先生

書類 同封させて頂きませぬ。
遅くお詫言申しわけありません
でした。



正しいことをやっているのに
あらぬ疑いをおかけされて
腹は立ちますが、最後には
きっと正義が勝つ！と思っ
たので、今はがんばっていきませぬ。



おに何か出来るせがあれば、
声をかけて頂けたらと思っ
ます。



よろしくお願ひします。



田嶋先生の授業についての考察

私は東京福祉大学・大学院に5年間在籍し、田嶋先生の授業を受講してきました。その中で感じたことを、述べたいと思います。

初めて田嶋先生の授業を受けたときは、教科書通りの授業とは違う雰囲気、少し戸惑いました。どの様なところに戸惑ったのかというと、私自身の価値観の偏っている部分が先生の授業によって明らかになっていくことにより、いきなり「自分の欠点を突きつけられた」事に戸惑ったのです。

私たち学生は、卒業して臨床心理士の資格を取得したら、これからたくさんの人のカウンセリングに関わっていきます。その際に自分自身の価値観に偏りがあることは、クライアントに対して大きな悪影響を与えてしまいます。田嶋先生の授業では「他人からの意見を被害的に受け取ってしまう」「自分自身に自信が無く、他人の意見を全部鵜呑みにしてしまう」「一般論にばかりとられる」など、いろいろな人が自分自身の偏りに気付く機会を与えてもらっていました。ただ、授業がそのような目的で行われているという説明はまったく無いまま授業が進められていたので、多くの生徒は授業の意味になかなか気付かず、初めの私がそうであったように、授業の進行に戸惑っていました。しかし、その授業の意味に気付いた人にとっては、まさに学生時代にしか学ぶことの出来ないとても貴重な授業でした。

大学院に入学する前の私は「年上の人には敬うべきだ」「人の話はどんな話もきちんと聞くべきだ」というような多くの固定観念に固まっていました。しかし田嶋先生の授業により、それらの価値観の偏りや「他人によく思われたい」と必要以上に思うことの弊害などに気付くことが出来ました。

社会に出ると、他人の価値観の偏りについて助言してくれる人と出会える機会はなかなかありません。臨床心理士になっていくためには、どこかの時点で「自分自身の弱点」ときちんと向き合わなくてはならないと思います。そのような意味から考えても、田嶋先生の授業は、教育カウンセリング的な目的からも、大学院の授業の中で最も有効な授業であったと思っています。

平成24年5月27日

[Redacted signature area]

甲第 35 号証 の も の

私は、現在に至るまでの18年間、不登校・ひきこもりの子供、青年らの社会復帰を支援する■■■■を運営してきております。

そうした中で、さらなる専門性を身につけたく、東京福祉大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻修士課程において、三年間、田嶋先生にご指導いただきました。

田嶋先生の教えは、理論のみではなく、先生ご自身の臨床での経験を伝えていただけるものであって、すでに子供や青年との現場を持っている私にとって非常に有意義なものでした。

特に、「心理士側が自分自身の心をきちんと見つめ、そこでの葛藤を認識したうえで、子供達と接し、子供達の心を見つめる」という点においての、田嶋先生の厳しくも丁寧なご指導には、田嶋先生の「心理士を育てる側の人間としての責任」と「私たち生徒に対する深い愛情」が感じられ、毎授業、心にもうものがありました。

そうしたご指導は私のみならず、私を通じて■■■■のスタッフにも浸透し、結果、当事者である子供や青年達の社会復帰を早めることになっています。

私にとっての東京福祉大学大学院での三年間とは、まさに田嶋先生からのご指導を頂いた三年間であり、子供や青年達を支援する人間として、大きく成長させて頂いたと深く感謝しております。

平成24年5月28日

東京福祉大学大学院心理学研究科

臨床心理学専攻修士課程

平成23年度卒業

■■■■

■■■■

田嶋教授の講義を受講しての感想

田嶋先生の講義は、「自分のパターン化したあり方」に気づき、今までの自分を振り返る良い機会となりました。

私たちは、周囲から期待されること、評価されることによって、自分の存在の意味を見だし、その期待に答えることによって、自分の存在の意味を実感するのですが、もし、自分が誰からも期待されなくなってしまったときは、自分の存在の意味を失ってしまうと思ひ込んでいました。しかし、他人に気に入られよう、他人に認めてもらおうとして、自分の実力以上に背伸びをして出来ないことまで引き受けた結果、自分自身が一杯一杯になって結局それを実行出来なくなり、他人に迷惑をかけ信用と自信を失っていたと思ひていました。そんな思ひ込みや背伸びした自分から解放できたのは、田嶋先生の講義を受けたことでした。今までの私は「他人から嫌われてはいけない」「誰からも評価されなければいけない」「失敗してはいけない」と思ひ込み、八方美人な自分をつくり出し、他人に合わせているうちに「自分が、今何を感じて本当はどうしたいのか」がわからなくなっていました。しかし、自分のあり方、考え方、行動に気づき、八方美人な自分を悪者にするのではなく、時々頼らなければならぬ自分のパターンを暖かい目で見守っていく。その上で、自分のあり方を人任せにすることなく「自分が、今何を感じて本当はどうしたいのか」を自分自身で決めていくことの大切さと自分に無理することなく「今の自分ができること」をやっていくことでゆとりが生まれ、今までの自分よりもっと楽にのびのびできることを講義の場で体験することができました。

そして何より、田嶋先生の講義で感銘を受けたのは、グループセッションでの人と関わることの大切さです。

自分の思ひに気づき、こんな気持ちを相手に話したら受け入れてもらえるのだろうか？それでも試してみる。自分の思ひをはじめて相手に伝えて「自分をわかってもらえた！」その体験が、また自分の気持ちを相手に話してみようという気持ちになる。時には理解できないことやどうしても腑に落ちないことも相手に踏み込んで伝えてみる。そして少しでも相手の気持ちに近づけた時「相手のことがわかった！」その体験がこの人と話して良かったと思える。それがまた人と話したい、人と出会いたいという力になりました。自分の気持ちをわかってもらえて相手のこともわかる、そうしたお互いの心が通じた体験こそが「心が出会う」ことだということを知りました。

そして、これらのことは私の臨床の場で生かされ、日々の励みと支えになっています。

田嶋先生、本当にありがとうございました。

11.24.4.21

住所
名前

この度、私が在学しておりました大学院での田嶋先生の授業の方針について、批判的な意見がでていたと伺いました。そして、その内容を拝見し、私が大学院 2 年間で学んできたこととは内容が異なっておりましたので、筆をとらせていただきます。

私は、臨床心理士の受験資格取得という目的を持って東京福祉大学大学院に入学しました。大学は他大学でした。それまでの学部時代の授業は、座学がほとんどで、教授が講義をし、それを大勢の生徒が聞いているというスタイルでした。しかし、東京福祉大学は学生同士でディスカッションをすることや、自分の意見を持って発表する授業スタイルを大切にしていることを、パンフレットや学校説明会で拝見しておりましたので、そのような方針を楽しみに入学しました。

●心理学特論について

田嶋先生の授業は、非構成的エンカウンターグループのスタイルにのっとり、どの心理の分野でも必ず必要な『いま、ここ』で起こっていることに重きをおき、取り扱っていかうとする授業でした。教科書や資料を用いず、教授 2 名と、院生 13 人で、いま、ここで起こっていること、自分が感じていることを語り、自分を見つめなおす授業でした。このような授業スタイルは、教科書や資料がないので、みんながあまり経験したことのない授業スタイルだったと思います。私も、そうでした。ですから、最初は「どうすればいいんだろう」、「何を話せばいいんだろう」と不安になりました。

しかし、私はこの授業に安心して取り組むことができました。なぜなら、田嶋先生はいつも「なぜ、このような授業スタイルをとるのか」、「なぜ、自分がこのようなスタンスで生徒に関わっているか」を繰り返し、何度もおっしゃっていたからです。

例えば、「皆さんに、卒業して臨床心理士の資格を取り、現場に出て、社会のお役に立てる心理士になってもらいたい」、「臨床心理士とは、ただ話を聞いていけばよいのではない。クライアントの辛さを抱え、そのクライアントらしさをしっかりとキャッチし、返していかなければいけない」、「みんな（院生）も、その人らしさや、コミュニケーションの癖がある。それが、カウンセリングの現場では必ずあらわれる。だから、今、この授業を通して自分のことをよく知り、取り扱えるようになっていかなければならない。クライアントと共倒れになってしまうようでは困るのだから」、「心理は一人職場が多いから、職場でも他職種の人と上手くコミュニケーションを取れるようにならなければやっていけない。ここ（授業）は練習の場だから。社会に出たら誰も守ってくれないのだから、今この守られた環境のなかでたくさん練習して、本物の臨床心理士になってほしい」などです。

具体的に授業（エンカウンターグループ）に関しておっしゃっていたことは、「僕は厳しいことを言うけれども、決していじわるで言っているわけじゃない。僕たち（学校）には、ちゃんと社会で通用する臨床心理士を出すという責任がある」と繰り返しおっしゃっていました。ですから、田嶋先生がいつもどのようなスタンスで私たちに関わっているか、

先生がどのような意図で発言をされているか、しっかりと理解することができました。先生は、いつも明確な枠組みを提示されていました。ですから、ことばは厳しい時もありましたが、先生のその場の気分や、目的のないいじめと感じたことは一度もありません。

●ケースカンファレンスについて

田嶋先生のケースカンファレンスでは、レジュメは使っていませんでした。その理由については、神田橋條治先生の本のコピーを生徒に配布してくださいました。そこには、神田橋先生がカンファレンスの際にレジュメを使わない理由が記載されており、田嶋先生もこの内容に賛成なので、それにのっとって授業を進めていくとおっしゃっていました。私には、その意図と目的が理解できました。神田橋先生や田嶋先生のことばによると「自分のケースを自分のことばで語る時に、カウンセリングの場面で起こっていることが今ここであらわれる。そのことを取り扱い、吟味することが大切」とのことでした。

●修士論文について

私は、田嶋先生に修士論文の指導をしていただきました。先生の研究室で2人で話す機会は何度もありましたが、個人的な関係を持つように迫られたことも、そのような雰囲気を感じたことも一度もありません。私が研究したい内容をいつも応援してくださいました。「あなた（私）が本当に研究したい内容を執筆して、卒業できるように応援するから、のびのびとやりなさい」といつも励ましてくださいました。結果、これまでの卒業生の方々と少し違った修士論文のスタイルとなりましたが、多くの先生方にもご好評いただくことができました。臨床家を目指す私にとって、このことはとても自信になりましたし、田嶋先生のご指導なくして成し遂げることはできませんでした。

田嶋先生は、いつも私たち院生が現場にでてからのことを心配され、卒業後にたくましく働いていけるようにと、そのために今できることを教授として行ったださっていると感じていました。院生にとって、その授業スタイルが好きか嫌いか、得意か不得意かについては個人の問題で、それほどの先生方についても様々な意見を院生は持っていると思います。田嶋先生はいつも、ご自身の考えを持ち、院生にこうなってほしい、臨床心理士として社会のお役に立ってほしいというメッセージを伝え続けてくださっていました。それは、将来私たちが出会うであろうクライアントに対する思いやりともいえます。逆に、こんなに熱心に伝えてくださる先生は、私は他に存じ上げませんでした。ですから、臨床心理士になるために大学院に入学しましたが、田嶋先生に出会うことで「こういう人のことを、『臨床心理士』っていうんだ！」と、自分が目指す将来像が明確になりましたし、大学院で過ごした2年間は、臨床心理士としての自分の才能を最大限に伸ばせた2年間だったと思います。今、社会に出て4年目になりますが、大学院で過ごした2年間はなければ、

臨床心理士としての自分に、今ほど誇りを持ち、力強く働けていないかもしれません。

また、卒業してからも田嶋先生の講座に出席したがる生徒はたくさんいます。社会で適応していくことや目の前のことに追われた日々を送っていると、臨床家としての自分を忘れてしまいそうになります。そんな時に田嶋先生に会ったり、ケースの相談に乗っていただいたりすると、臨床家として自分がどうありたいか、原点に返れるのです。

田嶋先生は、院生のことを一番に考え、良い臨床心理士を育てていくことについて、いつも全力を注いでいる先生だと思います。私は、田嶋先生にご指導いただいたことをとても光榮に思っています。そして、これからも先生がお元気である限り、たくさんの方のことを学び、これから臨床家を目指す若い人に出会えたとき、先生が私たちにしてくださったように、力強く励まし、育てていけるような人材になりたいと思っています。そう思えるようになったのも、田嶋先生にご指導いただいたからです。

私は東京福祉大学が好きですし、ここを卒業したことを誇りに思っています。大学院で過ごした2年間で、私は精神的に安定し、自分を大切にできるようになりました。それは、田嶋先生のみならず、同期の院生の存在や先生方、みなさんのおかげだと思っています。そんなふうに思える生徒が、これからも増えていくことを心から祈っています。

2012年5月28日

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

田嶋先生の授業を受けて

当時から田嶋先生の授業に対して、同期のメンバーの人は何人か批判めいたことを話していましたが、私はそうは思いませんでした。授業で話す先生の話は、臨床に基づいていました。これから現場に出ていく心理士としての心持ちを伝えているのだと思って聞いていました。

これから実際にクライアントと出会う時、自分の弱い所や醜い所、恥ずかしいと感じるところに目を向けて向きあうことが、いかにクライアントの真の支援につながっていくのかということについて少しずつ理解できるようになりました。これは、授業を通してそのままの自分と向き合うことから始まっていたのではないかと思います。

最初は自分の嫌なところや受け入れにくい所に目を向けたくない気持ちが強くありました。そこに気づいて見てしまうと自分を受け入れられないのではないかという不安感や、醜い自分で居たくないという自分の理想像が崩れてしまう恐怖心を感じていました。その間は、先生の言っていることがよくわかりませんでした。自分の防衛であることに気付いたのは、先生の授業を受け続けながら昔から持っている気持ちを丁寧に考えてみようと思った時でした。不安感や恐怖心は自分が自分と向き合うことから逃げている気持ちであり、その気持ちのままでは臨床の場に出た時に、クライアントと心理的なコミュニケーションを取ることは出来ないと考えたからです。

日常の私たちの生活は、自分で自分の行動を選びとっていけます。自分が感じたくない自分を感じないようにしていく事は簡単な事なのだと、授業を通して自分の日常を振り返ることで思えました。しかし先生の授業の中で、今後自分が臨床心理士として仕事をしていく上で、その姿勢のままでは自分が志す心理士には程遠いであろうと感じました。私は河合隼雄先生のような心理士を志していきたいと心理士の資格を取ると決めた時から思っています。日常の些細なことの中で、意識しながらありのままの自分の感情や想いをまず自分が受け入れていかなければ、目の前のクライアントを本当の意味で受け入れていく事はできないと思うのです。

クライアントを受け入れて支援していく為にも、自分の弱い所やなかなか改善出来ないところ、見て見ぬふりをしたいと思う気持ちに向き合って意識して対峙していく覚悟を持ち続けていくことが必要であると、授業で心身共に気づいていく事ができました。

今臨床の場に出て、まだまだ自分の事を全て受け入れて、責任と覚悟を持ってまっとうしていると自信を持つことは難しく、今後の自分の課題であると思っています。クライアントとの面接の中でも同僚との交流の中でも、覚悟をして対峙し続けていくことは本当に大変ですが、田嶋先生はそのことも含めて「一緒に向き合っていこうよ」と言い続けてくれていたと思っています。その気持ちや姿勢は、今の自分の相談業務に生きてきていると実感する日々となっています。

H24.6.7.

田嶋先生の講義を受けての自己発見

学籍番号

「恩返し」ができれば何をしても大丈夫

「なぜあなたは誰からも頼まれていないのにここ（大学院）にいるの？」

田嶋先生からはずっとそう問いかけられていた気がする。だから先生の研究室で同級生と話しているときに、ふと「恩返し」という自分のテーマに気づけたのだと思う。自然と涙があふれる体験をした。内から湧き出る安心感、信頼感のようなものに出会えた。「自分は両親や亡くなった祖母に「恩返し」がしたくてここにいるんだ。自分が不登校をしていたときにお世話になった人へ恩返しするために、臨床心理学を学んでいるのだ。だからスクールカウンセラーになりたいと思っていたんだ。なんだ、自分は今までもしっかりと自分で自分の人生を生きてきたじゃないか。多くの人に支えられながらも、自らの人生を切り開いてきたじゃないか。じゃあ自分の思う「恩返し」ができれば何をしても大丈夫じゃん」と気づかせてくれた。

「自己嫌悪」という自分のパターンへの気づき

私はずっと自分を責めている“フリ”をしていたとも言える。自分で自分を責めているフリをすれば、自分で決断して行動しなくてもよい。「〇〇が××のことをいじめるのを見た。でもおれは何もできなかった。おれ自身もいやがらせを受けた。でも言い返せなかった。おれはいじめてないのに先生から叱られた。でも何も言えなかった。悔しい。おれが悪いわけじゃないのに。納得いかない。でも何も言えなかった。こんなダメな奴はおれじゃない。本当のおれじゃないから言えなかったんだ。だからおれは悪くない」と開き直ることができる。自分への言い訳ができる。自分を偽ることができる。人のせいにできる。自分の人生を生きないのは楽な面もあるが、そこに実感はない。生き生きとした感情はない。自分自身のもつ個性、魅力が表れない。どことなく息苦しい。そんなパターンに気づけた。

田嶋先生に出逢わなければ今の自分はない

田嶋先生の講義は毒だ。しかしそこに悪意はない。あるのは信頼感だけだ。厚かましく、押しつけがましい愛がそこにある。その人への信頼感があるからこそ、厳しいことを言える。愛のムチを打ち続けたい人なのだと思う。参加者全員に平等にムチを打つ。その人自身が生きづらさを感じているところに「土足で」踏み込んでいく。進んで「波風」を起こそうとする。しかし、それは「フリ」である。その結果、その人自身が生きやすくなることを心から願っている。自分の思考の癖に気づくことで、自分が「解放」される瞬間に立ち会うことができる。少なくとも私にとってはそうだった。その瞬間がたまらなく好きな人なのだと思う。

田嶋先生がいなければ今の私はいないだろう。先生のしつこい愛のムチがあったから、私は自分の人生のテーマに気づけ、自分の生き方を貫いている自分に気づけた。「誰がなんと言おうとおれはおれの生き方で行く。だからその結果出てきた責任は果たしていく。真摯に向き合い、対応していく。不器用でもいい。お前はお前の生き方をしろ」と。

先生は私のエンジンに火をつけてくれた大切な人だ。

田嶋教授の授業について

私は、2009年4月~2012年2月まで、東京福祉大学大学院在学中に田嶋教授の授業を受けました。大学院一年生の前期の授業では、主にエンカウンターグループ形式で進められました。まだ、クラスメートの人となりが分からない状態だったので、お互いを知る良いきっかけになりました。授業は主題を決めず、フリートーキングの形式で進められ、特にルールもありませんでした。私たちは、通信の大学院生だったため、全員社会人であり、会社や職場で仕事をしていることから、自然に役割という仮面をつけていて、本音で話すことを避けて生活をしていました。当たり障りのない会話や、世間の一般常識的な発言になりがちで、田嶋教授は、お茶のみ話しではなく本音をきちんと伝えるようアドバイスされていました。社会生活で本音を言うと問題となってしまうこともあるが、この授業では、安心して話せる、本音をいえる場なので、のびのびと腹を立てたり、悲しんだりしてよいということをお話されていました。初めは、授業の主旨がつかめず、“禅問答のようだ”と感想を言うメンバーもいました。なぜなら、1年前期の授業では、知識を得ることを目的とした授業がほとんどだったからです。田嶋教授の授業は、心理職としての実践につながる体験的な授業であり、教授が一方向的に話すのではなく、生徒が主体的に進める形式となっており、他の授業とは違った面があったためこのような感想となったのではないかと思います。しかし、次第に本音で話せるようになり、自分がどんなことに怒りや悲しさを感じるのか自分の体験をもとに話し、それについて、参加者が意見を述べ、それに対してさらに自分がどう感じるかを体験するうちに、自分の心の動きを少し離れた所から見つめ直すことが出来るようになったと私は感じました。時には、話したくないような過去の心の傷に触れる話をすることもありましたが、話している人が自分の世界にはまりすぎないように、田嶋教授がそれとなく介入し、話しすぎないように気をつけていたと思います。また、本音で話す場とはいえ、相手や自分を大切にしていない無責任な発言にたいして、田嶋教授自身が“僕はあなたの言ったことをこんな風に感じる”と、自ら発言することにより、生徒同士が傷つけあうことのないよう配慮し、発言した本人が自分自身を振り返ることができるよう促されていたと思います。私自身も、授業の中で自分の家庭環境や職場での出来事を語る中で、自分の苦しさや弱さに気づき、授業後もしばらくそのことについて深く考える余韻をもつことによって、自分と向き合うことができたように思えます。大学院の授業は、4年生大学の時と違い、授業をただ聞いていれば卒業できるというものではなく、主体的に授業に参加していくことが求められます。そのため、すべての授業での自分の発言というものは、自分自身に責任をもっていくべきものであると感じています。田嶋教授は、心理職になるのであれば、自分の心の動きを理解することが重要であり、そうすることによりクライアントと真に関わることができると話されていました。私は、授業を通して、自己理解・他者理解・自己受容・自己主張・信頼感・感受性の強化といったことを学んだと思います。